劇団民藝公演

新 正午浅草

荷風小伝

戦前戦中、日記に軍政府への
批判を書きつらねた永井荷風
最期まで貫いた自由きままな
独居暮しをユーモラスに描く
読売演劇大賞優秀男優賞受賞作品！

作・演出＝吉永仁郎　演出補＝中島裕一郎
装置＝堀尾幸男　照明＝前田照夫　衣裳＝宮本宣子　効果＝岩田直行
舞台監督＝西部 守

水谷貞雄
松田史朗
佐々木研
佐々木梅治
みやざこ夏穂
保坂剛大
橋本 潤
田畑ゆり
白石珠江
飯野 遠
高木理加
長木 彩

新 正午浅草

荷風小伝

作・演出＝吉永仁郎　演出補＝中島裕一郎

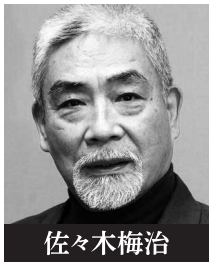
権威、権力、盛名、自己顕示を徹底的に嫌い、一切の群れに加わらず、時流に背を向けた文豪・永井荷風［一八七九―一九五九］。小説ではひかげの女性に温かなまなざしを注ぎ、日記「断腸亭日乗」には軍政府へのきびしい批判を書きつらねました。戦後は千葉県市川市に移り住み、江戸の面影を残すその自然と風情を愛します。

荷風は世間とつきあわず家庭をもたず、ときに独り暮らしのさびしさが身にしみたようですが、個人の自由を求めつづけ、最期も独居老人の孤独死をみずから選びます。いま荷風が生きていたら日記に何を記すでしょうか。自分らしい生き方を望んだ半生を、老後と過去とを行き来しながらユーモラスに描きます。荷風役の水谷貞雄が、読売演劇大賞優秀男優賞を受賞。「本当に荷風はこんな人だったのではと思わせる、飄々とした雰囲気があった」と絶賛されました。

［あらすじ］昭和三十二年秋の昼下がり、市川市八幡。独りで暮らす七十七歳の荷風が、書斎にもち込んだ七輪に木片をくべて、野菜入りの自称釜飯をつくっている。そこへかつての愛妾お歌が久しぶりに訪ねてくる。

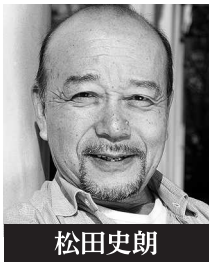
お歌はそのわびしさに驚くが、荷風は二千万円の預金通帳を入れたカバンを置き忘れたことも面白おかしく語ってみせる。思い出話はやがて四十年書きついだ日記へと移り、名作「墨東綺譚」の娼婦お雪との日々がよみがえる……。

戦後に間借りした部屋での自炊風景



佐々木梅治

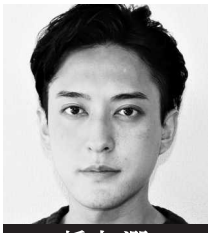
佐々木研



松田史朗

水谷貞雄

田畑ゆり



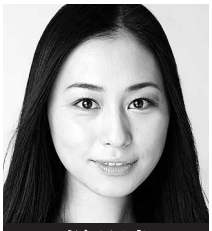
橋本 潤

保坂剛大

みやざこ夏穂

長木 彩

高木理加



飯野 遠

白石珠江